

# 東方摩耗録

力尽きた奴

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

心配しないで、また会えるから

# 目次

東方摩耗録

設定（一文）

1

12



# 東方摩耗録

もう何度目だろうか。幾度経験しようとも慣れることの無い喪失感。そして無力感。護らなければならぬ。

失わせてはならない。

彼女はまだ死ぬべきではない。

俺はまだやれる。回数も十分ある。何も問題は無い。

「大丈夫、今度はやれるはずだ。だから、待っていてくれ」

抱えていた冷たくなってしまった小さな体を地面に優しく横たえさせ、懐からナイフを取り出す。

「何をするつもりなの」

普段の胡散臭さは感じられない、弱々しい女性の声が聞こえる。

「助けに行く」

俺でなければ助けられないのなら、俺はやる。

「もう、無理よ……」

絶望を含んだその声を見殺してナイフを喉に押し当て、力を込める――

「貴方何をしているの!？」

血が吹き出る。意志も精神も十分だ。これなら問題なく戻れる。

「貴方まで死んだら、あの子たちに何て言えば良いの!?!こんな……こんな失い方なんて

……!」

安心して、また会えるから。またみんなで笑い会える日がくるから。

「能力が使えないっ、血が……どうすればっ……!」

世界が歪んでいく。全てが溶けて混ざりあう。

「お願い、死なないで……」

——大丈夫、泣かないで。

世界が黒に染まる。沫が昇って弾けて消える。体の傷が消えていく。

全てが泡に覆われ、徐々に光で満たされていく。

急速に意識が浮上する。

——今度はうまくやるから。

——待っていてくれ、橙。

「この肉達磨がああああ!!」

短剣片手に悪霊に向かって駆け出す。

その悪霊は非常に醜悪で、何千もの人間や妖怪の死体が圧縮された赤黒い弾力のある

モノで直径百メートル程の丸い体を造り、腕や脚を連ねたような触手を複数操っていた。

体のいたるところから骨が突き出ており、目が現れては消え、多数の歯茎が剥き出しの口は体中を動き回っている。

触手は骨や腐敗した腕等が多く、所々で腕や脚の途中からも枝のように生えている。

攻撃方法はあまり多く無かった。しかし、どの攻撃も生半可な威力ではなかった。

メインの攻撃は触手による鞭のような風呂払いや叩き潰しだが、不規則に生える腕や視認できるほど濃密な怨念によって回避し辛い強烈な一撃となっていた。

射出される骨は霊夢の障壁をも破り、時折放たれる呪いや怨嗟の声は妖怪にとって必殺の一撃となる。

そして、厄介なことに複数の能力を操ってくる。その中には能力無効化空間を作る程度の能力等、強力なものもいくつかあり、霊夢や紫の絶対的な優位性を消していた。

「下がりなさいっ、死にたいの!？」

紫の制止の声を無視して悪霊に近づいていく。

攻撃方法を探さないと、橙は助けられない。俺が一人で生き残れるようになって、誰かを救うことはできない。弱い人間一人に出来ることは、誰かに次の一手を渡すことだけだ。



活路を見出だすため、肉達磨の猛攻の中、攻撃を見極めただひたすら悪霊に向かつて突き進んでいく。――

最初は戻った直後に全身をバラバラに引きちぎられていた。

次も、その次も何も出来ずにねじ切られた。

最初に戻った時点では既に霊夢が死んでおり、渡されていた夢想天生を封じ込めた札も壊れてしまっていたのだ。霊夢のフオローが無ければ何も出来ず、能力が遮断されてしまう位置に居ると紫の援護も間に合わない。

いくら敵の攻撃を見極められるようになっても、俺が生きていることは邪魔にしかならなかった。

橙を護りきるためには橙を守る余裕がなくてはならない。もつと前に戻って態勢を整える必要があつた。

戻る時点を設定する。体の奥からなにか大切なものが抜け落ちる感覚があつた。それを確認して、自害した。

戻った場面は、先ほどまでと何も変わらず全てを失っている状況だった。戻そうとした時間の中で起こった現象を修正するために必要な力が、能力強度を越えてしまったことで不発になってしまった。

自らを奮い立たせ、落ち着いて設定を行う。今度は成功し、札が壊れた直後に戻ってきた。それを確認してから再設定を行う。

霊夢が骨に貫かれていた。これでは駄目だ。

次は悪霊が霊夢に集中攻撃を始めた。ここでも挽回は不可能だろう。

次は霊夢が呪いから俺を庇って動きが鈍る。まだだ。

橙を掴んだ紫が触手を避けるために離れていく。既に藍さんがいない、駄目だ。

周囲に張られている結界が狭まり、逃げ場が少なくなる。失敗が増えてきた、焦りは禁物だ。

霊夢のお払い棒が触手に折られる。心は折れない。

藍さんが呪いから俺と橙を庇う。もう死なせたたくない。

橙が俺の手を引いて俺に狙いを定めた悪霊から逃げようとした。次は俺が護るから。

霊夢が紫と合流し、藍さんが近づいてくる。あと、少しっ。

悪霊の呪いと骨を避けて霊夢と分断された。

——さあ、仕切り直しだ。

目の前に触手が迫っていた。

「何やってんの、っんのバカ!」

霊夢が俺の首根っこを掴んで飛ぶ。直後に目の前を頭蓋骨が横切り、地面に衝突して爆ぜた。

「死にたくなかったら相手をちやんと見なさい!」

そう言いながら、爆ぜたのを確認した霊夢はその後の攻撃を大きく避けていく。

やっと戻って来れた、あの悪霊が突如出現した時に。

戻って、来れたんだ。

「なによ、ずいぶん余裕あるじゃない、っと」

「それでもないさ」

「じゃあなんで笑ってんの、つよ!」

襲いかかる触手を避けながらも喋る霊夢を見る。

「霊夢」

「何よ。あいにく今忙しいから、手短にしてもらえる?」

「相手の攻撃パターンが少し分かったよ」

反撃を開始しよう。

——死んでも動きを分析し、有効な攻撃方法を模索する。

誰かが負傷すれば自害し、自らが致命傷を負っても最後まで結末を見届ける。  
段々皆が悪霊の動きを捉えられるようになる。

——そして、ついに隙が見えた。

霊夢が触手を全て消し飛ばし、紫が呪いを受け流し、骨を飛ばそうとしたところを藍



そう気を抜いた瞬間、衝撃が体を貫いた。  
下を見てみると腹部に風穴があるのが見え、橙の方を見ると――

――上下に別たれていた。

「ちえええええええん!!」

手を伸ばしても届かない

ごめんね

もう油断しないから

待っててくれ、また会えるから

## 設定（一文）

主人公

外来人。能力があること以外は一般的な人間。

怠惰な面があり、向上心もあまりない。

幻想郷に迷い込み右も左もわからない中で妖怪に襲われて逃げていたところ、人の子供のところまで連れてきてしまったと思いい、何とか逃がそうとするぐらいの気概はある。

能力に目覚めてからは、橙の死の運命を回避するために自らを削りながらも奮闘することになる。

主人公の能力：時間を巻き戻す程度の能力

時間を戻した後は、それ以降の出来事は無かったことになるため、本人以外に知ることはまず出来ない。

巻き戻すには相応の力が必要であり、使用回数には上限がある。

必要な力は時間の長さとして出来事の重さで決まる。



橙

幻想入りした主人公の恩人。

部下の教育（橙視点）を行っていたところ、妖怪に襲われていた主人公と遭遇。しかし、そこで橙達を庇おうとしていたことから助け、それがきっかけで関わることになる。人に対しては結構ドライなところあるが、藍さまの言い付け通りに妖怪らしくを指す故の行動。が、生来の性格ゆえに割とチョロい。すぐなつく。

主人公の持ち物：博霊印の御札、妖夢のおさがりの短剣

御札には夢想封印が使えるように力が込められている。傍目からみたら完全に過保護。

短剣は妖力や霊体などを斬ることが出来る。練習用の短剣であったため、手垢とかは気にしてはいけない。

## 肉達磨

醜悪な見た目は数年悪夢に出るレベル。本体は多数の怨霊の凝縮霊体であり、体である肉塊や骨等は死者生者問わず取り込んだモノである。

凄まじい強さの怨みのエネルギーが一点に集中しているため、周囲の空間が少し歪んでいる。その影響で実質的に能力が無効化される領域が出来ている。

触手は大きく腕から腕が複雑に生えている形なため、軌道の予測が辛い。

射出される骨は人体そのものの大きさだが、複数飛ばしたり、塊で飛ばすために面制圧力は優秀であり、爆発するため厄介である。

呪いによる攻撃は、濃厚な怨念の集合である肉達磨の怨嗟の声が実体化したものであり、普通の人であれば即発狂ものであり、妖怪にとってはかすただけで致命傷になるレベルで相性が悪い。

完全に消滅させなければ復活してしまうため、怨霊が入り込めない空間か、一帯を焼き野原にできるような広範囲への殲滅能力がなければ倒すことは難しい。

周りの霊を引き寄せ、どんどん取り込むため時間が経てば経つほど協力的な悪霊になっていく。

霊力は苦手だが、霊夢の霊力弾を打ち消せる力がある。